

B-13 ゾニサミドにより幻覚妄想状態を呈した側頭葉てんかん患者4症例におけるHVA・MHPGの推移

福島県立医科大学医学部神経精神科¹⁾、
安積保養園²⁾

○上野卓弥¹⁾、管るみ子¹⁾、上島雅彦¹⁾、宮本百合子¹⁾、
渡部 学¹⁾、高橋留利子²⁾、丹羽真一¹⁾

ゾニサミド（以下ZNSと略す）は幅広い治療スペクトラムを持つ比較的新しい抗てんかん薬であるが、その副作用として、他の抗てんかん薬に比べて精神症状を来す率が高いことでも知られている。今回我々は、ZNS投与中に幻覚妄想状態を呈した側頭葉てんかん患者4症例において、経時に血中HVA・MHPG濃度を測定したので報告する。

＜症例＞

症例は当科で加療中の側頭葉てんかん患者4名（男性3名、女性1名）で、年齢は18～25歳であった。幻覚妄想発現時のZNS投与量は300～600mg/日で、ZNS血中濃度は11.4～43.8μg/mlであった。ZNS投与開始から症状発現までの日数は190～707日とばらつきがあるものの、4例とも最大投与量になってから30日以内に発現している。各症例の精神症状に対してはZNS投与中止と抗精神病薬の投与を行った。幻覚妄想の持続期間は症例2・3は1ヶ月以内と短期間であったのに対して、症例1・4は10ヶ月と長期にわたり持続した。

幻覚妄想発現時のHVA濃度は症例1：11.5～12.7ng/ml、症例2：10.6ng/ml、症例3：13.6ng/ml、症例4：9.6～10.9ng/mlであったのに対し、精神症状消失時のHVA濃度は症例1：7.4～10.0ng/ml、症例2：6.6ng/ml、症例3：6.6～10.5ng/ml、症例4：5.1～6.5ng/mlと全例において減少傾向を示した。一方、MHPG濃度は一定の傾向を認めなかつた。

＜考察＞

ZNS投与により幻覚妄想状態をきたした4症例において幻覚妄想発現時にHVA濃度の上昇を認めた。ZNSの作用としてドバミン系賦活効果があり、このドバミン系賦活効果が精神症状発現の一因となった可能性が高いと考えられる。

B-14 抗てんかん剤断薬後に強迫観念次いで妄想状態(妊娠中の子どもが自分の子では無い)へ経過した1例

川崎市立川崎病院精神科¹⁾、昭和大学医学部小児科²⁾、
松戸クリニック³⁾

○久場川哲二¹⁾、古莊純一²⁾、飯倉洋治²⁾、丸山 博³⁾

我々は過去本学会で、抗てんかん剤断薬後の精神症状について報告してきた。今回の発表も今までの一連のものである。

症例：24歳 女性 ピアノ教師 現在 妊娠中
家族及び既往歴：特に無し

臨床経過：生後4ヶ月に熱性の全身強直間代性発作あり。昭和49年9月27日初診。初診時の脳波は睡眠時のみであるが正常。その後10月17日まで5回の発作あり。10月17日の脳波所見で睡眠時に全身に多棘性除波複合、左右の頭頂、中心領、側頭葉に棘除波複合が見られた。抗てんかん剤として、フェニトイン30mg、フェノバルビタール30mg、アセタゾラミド50mgの投与を開始した。その後日常生活に支障無く、発作回数（6～7回）また6ヶ月に一回の脳波（覚醒、睡眠時共に）正常、最終発作（昭和49年10月27日）、昭和60年8月21日治療終了。その後大学卒業、音楽教師の仕事をした。平成5年頃（発作開始、治療開始、治療終了から各々18年11ヶ月、18年9ヶ月、7年11ヶ月）より、歩行中の人に衝突するのでは、また何度も戸締りや食器洗いを気にする強迫観念が出現し、平成9年3月再受診した。受診時脳波所見は正常。精神症状改善のため、ハロペリドール0.75mg、プロマゼパム2mg投与した。その後症状の改善無くクロロリミブラミン10mgを追加した。症状は若干改善するも、平成9年10月妊娠に気付き服薬を中断した。

その後症状悪化し平成10年2月頃より、妊娠したが嬉しいくない、お腹の子が夫の子でなく弟の子に思われると言った。服薬を勧めるも妊娠中であることを理由に拒否した。本例の現在は、1)子どもへの否認妄想、2)夫への価値性感情が主である。

結論：昨年報告した如く、てんかんの治療経過が短く、断薬から精神症状発現までが長時間であることが特徴である。更に断薬後長時間に亘り精神症状が蔓延する例が散見されるがこれらの発現機序についても言及したい。